

メキシコ先住民運動の再接合は可能か？

小 林 致 広

キーワード

全国先住民運動 (Movimiento Indígena Nacional), 先住民全国議会 (Congreso Nacional Indígena), 自治を求める多元的先住民全国会議 (Asamblea Nacional Indígena Plural por la Autonomía), 多民族国家メキシコ (México Plurinacional), 事実としての自治 (autonomía de hecho)

Resumen

Durante el proceso de diálogo de San Andrés entre el gobierno federal y los zapatistas, se ha formado un espacio abierto de encuentro de los movimientos indígenas para discutir un proyecto nuevo de la nación mexicana. Hasta ahora, podemos señalar que hay tres momentos de hacer visible este espacio de convergencia a través de las movilizaciones nacionales indígenas en la coyuntura política.

El primer momento es durante el diálogo de San Andrés en el que participaron los pueblos indígenas a través de sus autoridades comunitarias. Varias tendencias de los movimientos indígenas organizaron el Foro Nacional Indígena y después construyeron el Congreso Nacional Indígena (CNI) con la estructura horizontal. Después del gobierno priísta que nunca cumplió los acuerdos de San Andrés, el gobierno foxista comprometió la reforma de la ley indígena basada en los acuerdos de San Andrés.

El segundo es durante “La Marcha de Color de la Tierra” en la primera mitad del año 2001, cuando el triunfo foxista ha dado esperanza a comunidades, organizaciones y grupos indígenas que tengan una nueva relación con el Estado. En esta alternancia, algunos líderes indígenas de la Asamblea Nacional Indígena Plural por la Autonomía (ANIPA) que conformaban el CNI veían una oportunidad de avanzar en la creación de instituciones dedicadas a atender las demandas indígenas. Sin embargo, con la contrarreforma de la ley indígena, los gobiernos panistas querían dismantelar los procesos autónomos de los pueblos indígenas. Los grupos adherentes del CNI decidieron hacer práctica la autonomía de hecho sin reconocimiento constitucional de ejecutar la autonomía.

El tercero es durante “La Otra Campaña” convocada por el EZLN en el primer semestre de 2006. En el ámbito político, además de las Juntas de Buen Gobierno zapatistas en Chiapas, hay muchos procesos de construcción autonómicas por los pueblos indígenas en resistencia. Pero este proceso nacional sigue siendo desarticulado por los gobiernos panistas que organizaron una política de contención con el discurso de la multiculturalidad, cooptando líderes de los movimientos indígenas.

En 2009, surgió una agrupación, el Moviminetto Indígena Nacional (MIN) por la rearticulación de movimiento indígena nacional. Después dos encuentros nacionales, fue propuesto el Proyecto Indígena de Nación por el Estado Plurinacional y Democrático en México en el 15 de septiembre de 2010. Sin embargo, este proyecto no tiene resonancia nacional. Por ahora, no podemos hablar de un proceso nacional de movimiento indígena articulado bien en México, pero sí existe movimiento nacional indígena que coincide en sus planteamientos.

はじめに—200年間の排除の歴史—

2010年のメキシコ「独立200周年、革命100周年祝賀」への反対運動は、20年前に展開された「コロンプス500周年祝賀」反対運動ほど目立つものではなかった。1994年のサパティスタ武装蜂起以降、「我々ぬきのメキシコは二度とあってはならない」を旗印として運動を展開した先住民運動の側から提出された、先住民族の存在を無視したメキシコ国家モデルに対する異議申し立てが取り上げられることはなかった。独立200周年記念日の前夜の9月15日、電飾イルミネーションで飾られたメキシコ市ソカロ広場から数ブロック西の新聞記者クラブで、「200年間排除された先住民族」と題するフォーラムが開催された（*La Jornada*, 19/sept/2010）。

このフォーラムは全国先住民運動（El Movimiento Indígena Nacional, 以下MINと略記）というグループが呼びかけたものだった。基調講演と部会討論の後、MINが策定した全国先住民運動宣言が読み上げられた（MIN 2010）。宣言は、「独立200周年、革命100周年」官製事業を祝賀すべきではなく、全国先住民運動の再接合（rearticulación）と再構築という闘争目標を提示している。MINの目的は、分散状態にある先住民運動をまとめ、先住民族全体を真に代表する多元的で非排他的な組織を構築することで、先住民組織の新しい空間を創出し、国の再建（refundación）を目指す幅広い運動の一翼を担うこととされている。

本稿では、先住民運動の停滞と分散化を克服する試みとしてMINが組織されるまでの過程を明らかにし、MINが提起する先住民運動とサパティスタ民族解放軍（EZLN）や先住民全国議会（Congreso Nacional Indígena, CNI）が展開してきた先住民運動とを比較する。それを通じて、MINが提起した問題設定と全国先住民運動の再接合の可能性について考察したい。

1 先住民運動の新しい出会いの空間の提起

メキシコの全国先住民運動はどのようなものとしてイメージできるのか。現在、国内には多種多様な先住民運動が存在しており、単一の先住民運動について語ることは難しい。民族集団的な特性をまとった政治組織に結集する先住民の意識には、民族集団としての文化表現の権利保護を志向するものと、生存基盤である土地や生産活動の保証を他のセクターとの連携のなかで目指すという二つの傾向がある。前者の傾向は、民族集団の諸価値や文化（言語、伝統、フォークロアなど）の保持を要求するもので、多文化主義的なインディヘニスモと呼ばれ、1970年代以降、参加型インディヘニスモの掛け声で展開された二言語・文化教育に典型を見出すことができる。一方、後者の傾向は土地防衛や生産の経済基盤整備といった農民運動と共通する要求を掲げる先住民運動

である。しかし、制度的革命党（PRI）の全国農民連合の先住民部会として1970年代半ばに結成された先住民全国審議会（Consejo Nacional de los Pueblos Indígenas, CNPI）を除き、全国規模の先住民運動が組織されることはなかった¹⁾。

1980年代、先住民の集団的権利の認知や自決権の法制化を求める先住民運動が台頭していく。先住民、先住民共同体、先住民組織、先住民集団、先住民会議など多種多様な運動体が、先住民の諸権利の防衛と認知を求めて活動を繰り広げてきた。しかし、エクアドル先住民連合（CONAIE, 1986年結成）のような全国規模の組織は、メキシコでは形成されなかった。しかし、先住民全体を代表する多元的な全国組織の構築が試みられなかったわけではない。

代表的なものは、1980年代末から1990年代初頭に展開された「先住民・黒人・民衆の抵抗の500年キャンペーン」の展開である。このアメリカ大陸規模のキャンペーンと連動して、メキシコ国内でも様々な運動が展開された²⁾。国家の諸制度の改革を通じ、先住民の諸権利の獲得を目指すものもあり、先住民と国家の関係を問い直し、多元的国家モデル構築を模索する運動が、メキシコ先住民運動のなかに芽生えていた（Palafox 2003:9-11）。しかし、新自由主義的な政策を推進していたサリナス政権（1988～1994年）の憲法4条・27条の改正に対して、有効な反対運動を展開できる全国規模の先住民運動は十分には組織されなかった³⁾。

「抵抗の500年キャンペーン」の終了以降、メキシコで全国規模の先住民組織の新しい空間が組織された時期は、少なくとも3回あった。1回目は1995年後半から1996年にかけてのサンアンドレス対話の開催と先住民全国議会創設の時期である。2回目はフォックス政権発足当初の2001年前半期、COCOPA法案に基づいた先住民法制定に向け、EZLNとCNIによって「大地の色の行進」が組織された時期である。3回目はEZLNの「別のキャンペーン」が展開された2006年前半期である。先住民組織の新しい空間の多くは、EZLNのイニシアティブで構築されたといえる。

1996年のサンアンドレス対話を契機に、先住民の自治復権という要求はメキシコにおける多様な先住民運動の結集軸となっていく。先住民自治という概念は、土地闘争、労働の権利と集団的管理といった農民運動から引き継いできた要求を再定置するとともに、民族文化の基盤としての先住民領域への権利、先住民自決権という新しい要求を位置づける基本理念となった。先住民自治という枠組みを通じ先住民問題を全国的テーマに格上げしたEZLNとの連携から、連邦レベルでの先住民の権利の法制化、EZLNとの連携継続の可能性、先住民共同体強化にどのように対応するかという問題も発生したのである（Jiménez 2005:431-33）。

II 新しい空間としての先住民全国議会の構築

先住民組織の新しい空間が最初に構築されたのは、EZLNと連邦政府との和解・和平交渉の過程で設定されたサンアンドレス対話が開かれた1995年後半から1996年にかけてである。サンアンドレス対話の第1テーマ「先住民の権利と文化」をめぐって、先住民全国フォーラムやCNIなど、全国規模の集会在断続的に組織された（中南米におけるエスニシティ研究班 1998:16-47）。EZLNと先住民共同体や先住民運動との折衝のインフォーマルなネットワークが形成され、先住民組織と社会運動との日常的な関連も強化され、EZLNと多様なアクターの政治的要求が収斂する過程で形成された「新サパティスタ・ネットワーク」は、特定の方針に基づいた政治組織ではなく、対立や分裂をとまなう流動的なものだった。

1996年発足のCNIは、組織された先住民とEZLNのあいだで形成された全国レベルのネットワークで、主に左派系の労働者・学生・知識人などから政治的支援を受けている先住民・農民の指導者や組織によって構成されていた。既存の先住民組織のすべてがCNIに参加したわけではないが、反対派組織からは、先住民族の要求を代表する正統な機関と位置づけられている。CNI参加組織には、親EZLN系から非EZLN系、民族文化を強調するインディアニスタ系から自治を強調する自治主義という幅の広い傾向が見られる（Leyva Solano 2005）。

ひとつは、「抵抗の500年キャンペーン」に関わっていたグループで、キャンペーンの調整役を担ったのはインディオ・民衆の抵抗の500年メキシコ審議会である。その中心的組織はゲレロ州の先住民の抵抗500年ゲレロ審議会（CG-500）だった。このキャンペーンと連動して組織された地域レベルのフォーラムも含めることができる⁴⁾。ほぼこれに近いグループとして、自治を求める多元的先住民全国会議（Asamblea Nacional Indígena Plural por la Autonomía, ANIPA）がある。ANIPAは、タバスコ州やチアパス州の先住民出身の国会議員、さらに民主革命党（PRD）内の人権インディオ人民事務局などが中心になって1995年5月に結成されたものだった。その基盤となったのは、1994年3月に組織された先住民選挙全国コンベンションだった。組織化に当たって中心的役割を担ったのは、チアパス州南部の先住民族トホラバル居住地域を本拠に1980年代末から活動していたインディオ人民独立戦線（Frente Independiente de Pueblos Indios, FIPI）である。FIPI創設者マルガリート・ルイスは、PRD下院議員として1990年前後に憲法4条改正に積極的に発言し、ANIPAは1992年5月に解散したCM-500に代わる全国先住民運動組織であると位置づけていた（Ruiz Hernández 1999:28）。

次いで挙げられるのが農地闘争を展開してきた先住民組織である。代表的なものは、上記FIPIとの関係が強かった左派系の農民運動の農業労働者農民独立センター（CIOAC）がある。そのほかに、ベラクルス州中部のソングリカ山地先住民組織地域調整委員会（CROISZ）、オアハカ州東部の地峡北部地域先住民共同体連合（UCIZONI）、チアパス州北部の先住民族チョルを中心とするシニッチェ（X'inich）などがある。

このほか、オアハカ州のミヘ民族サービス（SER-Mixe）、マヤ系先住民女性支援組織キナル・アンセティック（K'inál Antzetik AC）など、先住民族の人権支援活動を展開してきた組織もCNIの主要構成者だった。さらに、先住民地域の共同体ラジオ放送や開発・教育プログラムに関わっていたNGO、サバティスタ民族解放戦線（FZLN）の基盤組織として組織された全国対話市民委員会なども、CNIの主要構成員として挙げるができる。

CNIは、旧来の全国規模の社会運動組織に特徴的な垂直的構造を排除した水平的な組織と自己定義していた。そのため、出会いの空間として継続的に機能する可能性は低かった。セディージョ政権によるCOCOPA法案無視が明白になった1998年以降、連邦政府との交渉や政治参加に否定的なグループと積極的なグループと溝はしだいに顕著になっていく。行政地区、州・連邦議会での議席獲得に積極的なANIPAに代表されるグループはCNIから距離をとりだす。1998年4月末のCNIの第4回通常会議以降、通常会議への参加者はEZLNの行動原則を堅持する親EZLNグループに限られるようになった。

一方、ANIPAは、既存の政治体制の枠組内での政治参加の可能性を模索していた。1999年、ANIPAは全国政治集団（Agrupación Política Nacional, APN）として、連邦選挙庁（IFE）に登録申請した。ANIPA-APNは、インディオ人民の権利の回復（restitución）と防衛という原則に基づ

き、先住民、非先住で構成された市民による全国規模の政治集団として認可された。ANIPA-APNは、サンアンドレス合意の履行という政治的解決を通じ、多元的国家と多文化的社会を新たに構築できるとしている。ANIPA-APNは、多文化的な民主主義に基づき、民主的・多文化・寛容・非排他性・差異を尊重する社会を構築するため、他のセクターと連携しながら運動を展開する全国先住民運動と、自己定義している（ANIPA 1999）。

1998年10月の第2回CNI全国議会以降、CNIの内部組織の在り方の検討がつねに課題となっている（表1参照）。1999年12月のCNI第6回通常会議では、先住民運動が拡散している状態が指摘された。共同体、行政地区、州レベルでの先住民運動の統一、民営化に反対する非先住民組織との連帯推進、地域や州レベルでの先住民運動を接合する空間を構築する必要性などが指摘されている。SER-Mixeのアデルフォ・レヒーノは、先住民運動の再結集が最大の課題と強調している（*La Jornada*, 6/diciembre/2000）。

表1：CNIの全国議会と全国集会（1996年～2001年）

	年月日	場所	テーマ
第1回議会	1996.10.8～12	セントロ・メディコ	先住民族の権利の憲法認知、運動の統一、国と先住民族、現状分析
第1回会議	11.20	ミルバ・アルタ	内部組織化
第2回会議	1997.9.14～15	クイクルコ遺跡	国と先住民族、メキシコ国家と先住民族、先住民族運動の展望
第3回会議	10.9～12	人類学博物館	サンアンドレス合意実施に向けた戦略、土地と領域、経済自主開発と移民正義と人権、CNIのバランスシート
第4回会議	1998.4.29～30	DF. ソカロ	サンアンドレス合意、COCOPAと政府法案、先住民族の現況
第2回議会	10.9～12	DF. ソカロ	インディオ人民再構成、COCOPA法案と協議、CNI内部組織刷新強化、新自由主義に対する国内外先住民族の共同闘争、告発フォーラム、有形無形文化遺産としての先住民文化と精神性、移民
第5回会議	1999.4.8～9	電力労組会館	先住民族の現状、CNI内部組織強化、全国協議
第6回会議	12.3～5	IPN	サンアンドレス合意、2000年の選挙と先住民運動
第3回議会	2001.3.2～4	ヌリオ	サンアンドレス合意、先住民族の権利と文化の憲法認知

出典：Palafox 2003:112-114

III ネオ・インディヘニスモによる抱え込みと「大地の色の行進」

先住民組織の新しい空間が現実化した2回目の時期は、国民行動党（PAN）フォックス政権初期の2001年前半である。大統領選挙キャンペーン中の2000年5月22日、PRD、PRI、メキシコ環境緑の党（PVEM）に近い先住民運動の指導者や知識人のグループの意見広告が全国紙上で発表された。このグループには、PRD系からANIPA総裁マルガリート・ルイス、CG-500代表マルセリーノ・ディアス、アルテペトル・ナウァ協会マルコス・マティアス、先住民女性全国調整委員会（CNMI）マルタ・サンチェスなどが参加していた。PRI系からメキシコ先住民審議会（Consejo Indígena Mexicana）代表エンリケ・クー、PVEM系から下院議員アウロラ・バサン、さらに知識人として先住民言語作家協会代表ナタリオ・エルナンデスなどが参加していた。中心的な役割を

果たしたマルコス・マティアスは ANIPA や先住民体験分析セミナーの創設メンバーで、米州インディヘニスタ協会 (III) 専属研究者で、1996 年以降は国連先住民作業部会など国際会議にも参加していた⁵⁾。

先住民開発委員会創設など一連の提案は、各大統領候補に事前に示されていたが、何らかの対応を示したのは PAN だけだった。フォックス候補との会合には、仲介役の III 総裁ホセ・デル・バルと PVEM 系の先住民民族ウィシャリカとニャニユのメンバー 12 名が参加した (Molina Ramírez 2000:4)。6 月 14 日、「国家と先住民との新しい関係にむけて—ビセンテ・フォックスの先住民との公約」と題する広告が全国紙に掲載された (*La Jornada*, 14 de junio, 2000)。

2000 年 7 月の大統領選挙でのフォックス候補勝利によって、先住民開発審議会の創設は具体的な日程に上ってくる。先住民開発審議会は、先住民地域での連邦行政権力の活動を評価し、公共政策作成に向けた勧告をおこない、全国先住民庁 (INI) などに必要な改革を提案する「インディオ人民の代表と先住民に詳しい専門家」で構成されると位置づけられていた。党内に先住民運動の関係者が皆無だったため、フォックス政権は INI 関連機関などで働いていた先住民指導者や専門家を選択的に採用していく。この過程で、ANIPA 系の先住民運動指導者の一部はフォックス政権に抱え込まれていく (López Bárcenas 2000)。

フォックス政権はマルコス・マティアスを INI 総裁に任命するが、先住民出身者が INI 総裁となるのは初めてだった⁶⁾。マティアスは、ゲレロ州北東部のナウァ居住地域を管轄するチラパの INI 調整センター所長 (1989～1990 年) を務め、サンアンドレス対話では EZLN 側顧問の一人で、PAN 政権と先住民指導者との橋渡し役だったホセ・デル・バルが総裁を務める III の「先住民育成計画」責任者 (1997～1998 年) でもあった。マティアスは、INI の州代表委員として、チアパス州では FIPI のマルガリート・ルイス、ゲレロ州では CG-500 創設者ペドロ・デ・ヘススといった ANIPA 系の先住民運動関係者を任命した。

2000 年 12 月 4 日、フォックス政権は COCOPA 法案を憲法改正案として国会上院に提出した。2001 年 1 月 19・20 日、国会内で「先住民の権利と文化に関する憲法改正に対する先住民フォーラム」が開催され、30 名余りの専門家や有識者が意見表明をおこなった (Cámara de Diputados 2001)。オアハカ州関係者が 10 名と多いが、背景には「習わしと慣習」に基づく行政地区首長選挙を認める州法改正が 1997 年に実施されていたことがある。ついで、チアパス、ゲレロ、ミチョアカン州の関係者が各 2 名となっている。また、FIPI や ANIPA 創設顧問のアラセリ・ブルゲティ、元 INI 総裁サロモン・ナーマドなど、社会人類学高等研究調査センターや国立メキシコ自治大学 (UNAM) 社会調査研究所の研究者も参加している。当然ながら、III 総裁のホセ・デル・バルもフォーラムで発言している。

一方、上から組織されたフォーラムとは別の形で、サンアンドレス合意の履行と先住民の文化と権利に関する憲法改正を求める運動も組織されていった。それが、2001 年 2 月末から 3 月上旬にかけ、EZLN と CNI によって展開された「大地の色の行進」である。その目的は、メキシコ各地の先住民による自治獲得のための闘いの経験を交流しながら、先住民の権利と文化に関する憲法改正に関する先住民の声をまとめ、国会で直接意見を表明することだった。行進の過程で立ち寄ったメキシコ中南部の先住民共同体で多様な集会在組織された。2001 年 3 月 2・3 日、ミチョアカン州パラチヨ行政地区ヌリオ共同体で第 3 回 CNI 全国議会が開催される。参集した 41 民族集団の代表約 3,500 名には、フォックス政権に接近していた ANIPA 系の FIPI や CG-500 のメ

ンバーも含まれていた。首都到着から 20 日以上経過した 3 月 28 日、EZLN 司令官 4 名、CNI 代表のナシオン・プレペチャ (Nación Purépecha) のファン・チャベスと SER-Mixe 代表のアデルフォ・レヒーノが国会で意見表明をすることができた。

しかし、COCOPA 法案の精神を無視した反動的な先住民法案が、上院の法案作業部会で作成され、上院が全会一致で採択した先住民法案は、PRD 議員とオアハカ州選出の PRI 議員は反対したものの、PAN、PRI、PVEM の賛成多数で国会下院採択された。採択された先住民法に関して、INI 総裁マルコス・マティアスは、COCOPA 法案と異なった理念のものであると指摘し、大統領府に付設された先住民族開発局に抜擢された先住民ニャニュ出身のショクトル・ガルベスも「望まれていた法案ではない」と表明した。また、先住民族ミシュテコ出身の INI 司法局長ロペス・バルセナスは、国外で先住民族の自治を推進するポーズをとりながら、国内で否定的な対応を繰り返す連邦政府の二枚舌を批判し、オアハカ州先住民法のレベルにも達していないと批判した (小林 2002:142-148)。

反動的先住民法に反対する運動が展開されたが、2001 年 8 月、先住民法は公布された。国内の先住民共同体から 300 件を超す異議申し立てが最高裁に提出され、国際労働機関への提訴も試みられたが、国家は先住民の諸権利の認知の問題は解決済みと宣言した (López Bárcenas 2003:433)。政権は EZLN の要求した先住民的要素を象徴的に取り込んだだけで、国家改革や関連する憲法改正に関する提案の大部分を拒否したのである。サパティスタが掲げた要求は、PAN 政権のネオ・インディヘニスモ的⁷⁾ 言説に変換されたにすぎなかった (Navarrete 2010)。

2001 年後半期、フォックス政権に接近していた ANIPA 系の先住民指導者の一部は、先住民組織や先住民運動の基盤組織の信頼関係を失っていた (Overmyer 2010)。ANIPA 系組織の内部でも、PAN 政権との関係を問い直そうとする動きが見られるようになった。一方、先住民組織の新しい出会いの空間として発足した CNI は、体制の立て直しを余儀なくされた。2001 年 11 月の第 8 回通常会議には、国内 13 州から 86 の先住民共同体や先住民組織の代表が参集し、CNI 継続委員会と作業部会の解散、移行委員会の組織化が決められた。20 名の移行委員会メンバーに、半年前の第 3 回 CNI 全国議会に参加していた ANIPA、ANIPA 女性会議、FIPI といった先住民運動組織、CIOAC など PRD 系農民運動関係者は見あたらない⁸⁾。

IV 抵抗の共同体における「事実としての先住民自治」の模索

COCOPA 法案に基づく先住民法案の制定に向け、2001 年春先に展開された「大地の色の行進」という全国規模で展開された先住民動員は、連邦政府の不誠実な対応で完全に消耗させられてしまった。2001 年 2 月の第 3 回 CNI 全国議会では、「我々の先住民族の統合的再構成 (reconstitución integral) にむけて」と「我々の先住民族の集団的権利の憲法認知を目指して」という二つのスローガンが掲げられていた。しかし、2006 年 5 月の第 4 回 CNI 全国議会では、後者のスローガンは降ろされている。EZLN や CNI は、先住民自治の権利の保障を憲法改正に期待するよりも、「事実としての先住民自治 (autonomía de hecho / en los hechos)」を実践することにしたのである。

2001 年 8 月以降、CNI に属する先住民共同体のいくつかは、自らの共同体を基盤とした自治実践を宣言した。中央高原周辺では、連邦地区の先住民ナウァが居住するミルパ・アルタ区の 7 共同体とメキシコ州オコヤカック行政地区サンペドロ・アトラブルコは、「共同体財産と先住民自治

に関する宣言」を8月9日に発表している。8月19日には、ミチョアカン州の先住民民族プレペチャのヌリオやオクミチヨなど8共同体は、ナシオン・プレペチャ布告⁹⁾を再確認し、共同体の土地やエヒードの運営について自治権を全面行使すると宣告した。ベラクルス州北部では、先住民民族トトナカ居住地域のコユートラ共同体、南部ではブラーヤ・ビセンテ地区ショチアパ共同体などが、既存の行政地区からの独立を求める運動を展開していた。ゲレロ州東南部の先住民民族アムスゴ居住域のショチストラワカでは、PRI派首長の強権支配体制に対抗するための先住民市民戦線が構築されていた。2002年12月、地区先住民の「習わしと習慣」で選出された伝統的権威者審議会が組織され、スルハー (Suljaa') 自治行政地区が誕生していた。

2003年3月末、この先住民自治行政地区スルハーで、CNI中部太平洋地区の第9回拡大会議が開催され、国内14州から約300名の代表が参加した。集会には、スルハー自治行政地区を支援するアムスゴ民族審議会 (Consejo de la Nación Amuzga) のマルタ・サンチェス¹⁰⁾ などANIPA系の先住民組織のメンバーも参加し、分科会で議論がおこなわれた。第2部会では、政党と先住民組織の関係のあり方が議論され、ANIPA系の発言者は、先住民独自の政治原則を堅持しながらも、政党と連携する必要性があるとした。一方、非ANIPA系は政党の役割に批判的で、ANIPA系の先住民運動のメンバーが連邦・州政権の官僚などに就任したことや、ANIPA-ANPとして登録していることを厳しく批判した (Anónimo 2003)。こうした議論を踏まえ、共同体全体総会を通じた参加・意思決定・代表選出という独自の方法の正統性が確認され、政党はこうした先住民自治の在り方を尊重すべきという決議が採択された。同時に、先住民民族の統合的再構成の方法は多様であり、基盤組織を強化するためCNIの地域化が急務であるとされた (CNI 2003a)。

2003年7月、EZLNは、善き統治評議会 (Junta de Buen Gobierno, JBG) 体制のもと「事実としての先住民自治」を構築する方針を発表した。チアパス州のEZLN支持基盤地域に複数の反乱行政地区からなるJBG管轄区が設定され、先住民自治の体制作りが進行していた (小林 2004)。

EZLNは9月開催予定の世界貿易機構のカンクン閣僚会議に反対する運動を呼びかけ、それに対応したCNIの8月末の会合でCNI継続委員会の組織化が公表された。CNI継続委員会は13名で構成され、オアハカ州関係者が5名で、SER-Mixeとフアレス山地組織連合は移行委員会から継続して委員会の構成員となっている。ANIPA系の先住民組織は継続委員会に含まれていない。一方、ミチョアカン州ヌリオ、メキシコ州先住民民族ニャニユのアトラプルコ、メキシコ市ショチミルコ区の先住民民族ナウァのトラネパントラ、2002年末発足のスルハー自治行政地区伝統的権威者審議会など、「事実としての先住民自治」を実践する先住民共同体がCNI継続委員会メンバーとなっている。このことは、ANIPA系の組織の離脱を契機に、「事実としての先住民自治」の実践がCNIの基本方針とされたことを物語っている。

21世紀になってからのCNIの活動はしだいに低下し、CNIの4地域部会で現在も機能しているのは、中部太平洋地域だけである。2003年夏以降のCNI中部太平洋地域の集会の多くは、「事実としての先住民自治」を実践している先住民共同体で開催されるようになっていく (表2参照)。集会には、チワワ、ベラクルス、オアハカ州など中部太平洋地域でない地域の先住民運動や先住民共同体が参加している (González 2005)。例えば、オアハカ州テワンテペック地峡部のランチュ・グビナ共同体における第13回集会は、ウニオン・イダルゴ市民審議会 (CCUH) 指導者逮捕を受け、急遽開催されたものである。隣接するチアパス州の農民組織も参加し、プエブラ・パナマ計画に代表される新自由主義的開発に抵抗する先住民共同体への弾圧が数多く報告されている。

表2：CNI 中部太平洋地域の集会（第10回～17回）

回	年月	州	先住民民族	共同体	特記
10	2003. 8	ドゥランゴ	ウィシャリカ	Banco de S. Hipolito	EZLN カラコル創設
11	2003. 11	ハリスコ	ナウア	Ayotlan	EZLN10・20周年キャンペーン
12	2004. 3	DF	ナウア	S. Pablo Oztotepec	S.F. トラネパントラ内紛
13	2004. 5	オアハカ	地峡サポテカ	Ranchu Gubina	ウニオン・イダルゴ指導者逮捕
14	2004. 8	ミチョアカン	プレベチャ	Ocumicho	EZLN 「善き統治評議会」への支持
15	2004. 12	DF	ナウア	S. Pedro Atocpan	
16	2005. 5	ミチョアカン	プレベチャ	Zirahuén	UCEZ の本拠、カラコル設置
17	2005. 11	ハリスコ	ウィシャリカ	Tuapurie	「別のキャンペーン」開始宣言(8月)

出典：CNI（2005）

先住民組織や先住民族との出会いの空間を組織する試みは、EZLN 側からも提起される。2005 年夏、EZLN は「別のキャンペーン」を 2006 年 1 月から全国規模で展開することを表明した。「別のキャンペーン」は、新自由主義的な統治モデルでは EZLN の提起した先住民族の基幹的要求やローカルな政治実践が不可能であることを踏まえ、反資本主義の左派の多様なセクターと連結し、新たな立憲プロジェクトを展開することを明らかにしたものである（Navarrete 2010）。

「別のキャンペーン」準備の一環として、2005 年 8 月中旬、チアパス州東部オコシング地区カルメン・パタテで「先住民組織とインディオ人民と EZLN の出会いの集会」が開催された。この集会には、中部太平洋地域だけでなく、チアパス、オアハカ、ペラクルス、サンルイスポトシ、プエブラ、イダルゴ州など 13 州から 59 先住民組織の代表団が参加した。集会では、先住民族の自治や権利を獲得する闘いを継続し、土地や天然資源の私有化に対抗する組織作りを他のセクターとともに構築する必要性が指摘された（Anónimo 2005; Díaz Marielle 2005）。2005 年 10 月段階で、「別のキャンペーン」支持の先住民族組織は約 120 に達したとされる。

2006 年 1 月からの「別のキャンペーン」において、EZLN 代表団は各地で多様なセクターと会合を持っていった。4 月初旬、ミチョアカン州ヌリオを訪問中の EZLN と CNI 代表団は、メキシコ州サンペドロ・アトラプルコ共同体における第 4 回 CNI 全国議会の開催を告知した。5 月 2 日のテスココ市サルバドル・アテンコでの弾圧で、「別のキャンペーン」は中断したが¹¹⁾、第 4 回 CNI 全国議会は 5 月 6 日に開催され、国内 25 州 30 先住民族から約 900 名の代表団が参加した。

第 4 回全国議会では、「事実としての先住民自治」の実践、巨大プロジェクトの押し付けへの抵抗などの報告がおこなわれた。また、共同体の伝統を無視する職業的政治家の支配を認めてきたことを自己批判する必要性、CNI の分散化を踏まえ連帯強化にむけた相互連絡の緊密化や定期的会合の必要性などが指摘された。第 6 ラカンドン密林宣言が提起している国の再構築を目指し、憲法と国家の新しいプロジェクトを他のセクターと共同して模索するため、路線を明確化すべきという意見も提出された。第 4 回全国議会では、全国レベルでの先住民運動の接合、弾圧に即応できる体制確立の必要性に関する認識は共有されたといえる（CNI 2006; Bermejillo 2006）。2006 年 6 月開催の CNI 緊急全国会議では、CNI の地域単位での活動強化にむけた原則の確認や「別のキャンペーン」内での先住民族の位置づけなどについて議論され、2006 年選挙による権力構造の変化のいかにかわらず、先住民族の復権とメキシコ全体の変革にむけた闘いを継続することが確認された（Vera 2006; Díaz Marielle 2006）。

2006年7月の大統領選挙後、北部地域やユカタン半島、中部太平洋地域など、CNI地域集会所が開催され、2006年11月中旬には、CNI中部太平洋地域の主催によって、ハリスコ州メスカラ共同体で「母なる大地の防衛と先住民自治」全国フォーラムが開催された（González 2006; CNI 2006b）。この時期以降、CNI集会所では先住民自治の基盤である土地や領域を防衛する方針が前面に出されていく。第2次「別のキャンペーン」で、EZLN代表団と先住民共同体を歴訪していたCNIは、2007年10月中旬にソノラ州ヤキ部族領域ピカムで「アメリカ大陸の先住民の抵抗と母なる大地、先住民領域と文化の防衛」をテーマにアメリカ大陸先住民集会所を開催している。国内外での土地や領域の防衛闘争との連携が模索されたものの、CNI系の先住民組織が既存の政治体制から離脱し、「事実としての先住民自治」を実践する試みは、十分な成果を達成できなかったとは言えない。

V 政治参加という選択肢と全国先住民運動の再接合

2003年5月、先住民開発全国委員会（CDI）、国立先住民言語研究所（INALI）の発足とともに、政治参加を追求してきたANIPAも新たな対応を余儀なくされる。21世紀初頭、ANIPA-ANPは、国内14州約50の先住民組織、北バハ・カリフォルニア、ハリスコ、サカテカス、シナロア州の先住民共同体など、約14,000名の登録者を有し、動員能力はCNIを凌ぐとされていた（表3参照）。

表3：21世紀初頭のANIPA構成の先住民運動

チアパス	多民族自治地域（RAP）、マヤ・イック（MAYA-IK）、チアパス州先住民医師組織（OMICH）		
オアハカ	マサテカ低地インディオ人民独立戦線、人民の権利防衛委員会、チョ Choltec 地区先住民審議会		
モレロス	ANIPA調整委員会、文化集団調整委員会、社会連帯協同組合トラルナワトル、ウアスルコ（Huazulco）		
ベラクルス	ソングリカ山地先住民組織地域調整委員会（CROISZ）		
ミチョアカン	ナシオン・プレバチャ組織（ONP）	ゲレロ	CG-500
メキシコ	オトミ民族集団審議会	イダルゴ	共同体活動センター
プエブラ	ANIPA調整委員会	ソノラ	インディオ人民伝統審議会

出典：<http://www.laneta.apc.org/anipa>（2006年11月5日アクセス）

一方、連邦・州政府の先住民政策機関に「抱え込まれた」ANIPA系の指導者の一部には、個人的野心に基づいた対応で、基盤組織との繋がりを失った人物がいたことも確かである（Overmyer 2010:174-176）。ANIPA系の先住民組織には、連邦・州政府からの援助資金の運用が恣意的で、資金が断たれると活動が停止する援助依存体質のものがあつたことは否めない。

2005年4月18・19日、UNAM多文化国家メキシコ大学計画（Programa Universitario México Nación Multicultural, PUMC）¹²⁾の施設において、「21世紀の先住民の生成（El Devenir de los Pueblos Indígenas del Siglo XXI, 以下DPIと略記）」と銘打った集会所が開催された（DPI 2005）。約20名の出席者のフォックス政権の公約達成度に対する評価は否定的なものだつた¹³⁾。PAN政権の先住民政策は援助主義・統合主義的であり、先住民独自の政治アジェンダや計画の構築を

通じ、21世紀の国造りに参加する必要性が指摘された。出席者の顔触れは、2000年5月に意見広告を提出したグループに近く、先住民体験分析セミナー3名、ANIPA3名、ゲレロ州の3つの先住民組織の代表、CNMI調整官など、ANIPA系の人物が大半だった¹⁴⁾。元PVEM下院議員のアウロラ・バサンや、PRI系のエンリケ・クーもメキシコ先住民戦線代表として参加している。

この集会の基本的性格は、実質的に機能停止状態だったANIPAに代わるものとして、連邦・州政府などと交渉できる国内先住民を代表する機関を構築しようとするものだった。ANIPAの季刊誌や月刊誌は出されず、2005年度の活動資金報告書不備などの理由で、2006年度のIFE予算カット措置が取られていた。当時ANIPA代表に就任したマルタ・サンチェスは、2005年時点でANIPAの活動は極めて低下していたと、インタビューで述懐している（Gutiérrez Chon 2010:150）。

2006年2月14日、サンアンドレス合意調印10周年という名目で、DPIの第1回集会がPUNMで開催された（DPI 2006）。約90名の参加者は、ボリビアの先住民大統領誕生に代表される中南米の先住民運動の新段階を見据え、メキシコにおける先住民運動の接合とメキシコ先住民の将来像に関して議論した。「別のキャンペーン」が主張する政治参加拒否ではなく、投票という政治的権利を尊重することが表明された（Jiménez 2006）。「21世紀の先住民の生成にむけた協定」の政治委員（12名）の多くは、2005年4月のDIP創設集会に参加したマルタ・サンチェス、マルコス・マティアスなど、ANIPA系のメンバーだった（DIP 2006）。選挙終了後の9月、選挙で当選したマルコス・マティアスなどPRD下院議員やDIP参加の先住民運動組織の呼びかけで、全国先住民コンベンションが立ち上げられたが、副司令官マルコスの「フォックス政権従業員の衣替え」という批判により、実質的には機能しなかった。

カルデロン政権発足直後の2007年2月、DPIの第2回集会がPUMCで開催され、国内20州から86名の先住民組織関係者が参加したという（DPI 2007）。特徴的なのは、ANIPA系と思われる先住民組織のメンバーが多く、州別ではゲレロ州の参加者が多いことである。先住民体験分析セミナーという肩書のPRD下院議員マルコス・マティアス、前ANIPA代表マルタ・サンチェスなどとともに、行政地区役職者3名、州政府先住民局関係者3名、州CDI関係者2名など、16名が参加している。注目されるのは、CNIに積極的に参加していた地峡部サポテカの先住民組織CCUHのカルロス・マンソが参加者リストに挙がっていることである¹⁵⁾。

カルデロン政権発足後、連邦・州政府との交渉の場で、旧来の先住民エリートがブローカーとして活動できるスペースは限られてしまった。カルデロン政権は、先住民運動との関係が希薄な諸個人で構成される先住民政策協議委員会を立ち上げ、先住民組織などが推挙する人物を委員として採用する以前の慣行は踏襲されなくなった。機能不全という状態に陥っていたANIPAは¹⁶⁾、2008年にIFE配布金の不正使用などの理由でAPN登録を抹消されてしまった。

ANIPAの解体という状況のもとで、2009年12月5・6日、「全国先住民運動の再接合にむけた集会」がプエブラ州南東部コシュカトランで開催されることになった。集会ポスターではメキシコ先住民戦線（FPIM）が呼びかけ団体となっている。集会の目的は、「死のシステム」に対して各地で先住民組織などが展開してきた抵抗活動が運動や組織の弱さと孤立によって挫折している状況を克服するためとされている。25の呼びかけ団体すべてがFPIMを構成しているかは不明であるが¹⁷⁾、多くはベラクルス州とオアハカ州の先住民・農民組織で、ゲレロ州とケレタロ州から2組織ずつとなっている。この集会を中心的に運営したのは、プエブラ州やベラクルス州を基盤とす

るサパティスタ先住民農地運動 (MAIZ)¹⁸⁾、オアハカ州テワンテベック地峡部の UCIZONI、共同体的支援センター「協働」(CACTUS)である。集会には国内 12 州の約 40 組織の代表約 120 名が参加した。そのうち ANIPA 系とみなせるのは、全国農民運動組織 CIOAC、ミチョアカン州のナシオン・プレペチャ組織 (ONP)、ゲレロ先住民調整委員会 (CPIG)、モロス州の 1 組織ぐらいである。一方、集会実行委員会の MAIZ と UCIZONI は、ANIPA 系組織が参加しなくなった 2003 年以降の CNI 会議に参加していた親 EZLN 系の組織である。

3つの部会(全国先住民運動の強化に向けた戦略、内部や他の運動との調整・連帯、反弾圧戦線の戦略)では、南東部の先住民居住地域で展開されている高額電気料金反対運動の状況、オアハカ州の先住民民族トゥリケのサンファン・コパラ自治行政地区¹⁹⁾に代表される先住民自治や各地の共同体ラジオへの弾圧などが報告されている。また、国家予算の 0.5% しか先住民に割当てられていない状況、ゲレロ州の先住民言語の 20 年後の消滅の危険性なども報告された。採択されたコシュカトラン宣言では、「独立 200 周年、革命 100 周年」という官製祝賀事業への反対、共同体ラジオ解体攻撃といった先住民への迫害停止、遺伝子組換えトウモロコシ導入反対、先住民の先祖伝来の領域における巨大開発計画の即時停止などが主張されている。また、多民族集団・多文化・多民族国家 (Estado pluriétnico, pluricultural y plurinacional) としてメキシコを構築する運動を担うため、分散状態の先住民運動の再接合が不可欠と強調されている (ENRMI 2009)。

2010 年 2 月中旬、ミチョアカン州パラチョで第 2 回全国先住民運動の再接合にむけた集会が開催される。興味深いのは、ANIPA 系の ONP と親 EZLN 系のナシオン・プレペチャ・サパティスタ (NPZ) の両方が、集会実行委員会の中心メンバーになっていたことである²⁰⁾。また、ミチョアカン州 (PAN と PRD) やサンルイスポトシ州 (PRD) 選出の下院議員、あるいはミチョアカン州政府代表といった政党関係者も開会式に参列していた。16 州の 44 民族集団、92 組織の代表約 200 名は、(1) 先住民の協議の権利、(2) 憲法改正、先住民運動と政治参加、(3) 先住民運動と他のセクターの闘争の再接合戦略、(4) 先住民領域での農地・森林紛争、(5) 先住民統合的開発のための公共政策の 5 部会で議論を展開した。

発表されたパラチョ宣言では、多民族・多文化・多言語のメキシコ (México plurinacional, pluricultural y plurilingüe) を構築するために、先住民の多様な声を統一すべきことが強調され、「先住民の団結、自治、自決に向けて (Por la unidad, la autonomía y libreterminación (sic) de los pueblos indígenas)」がスローガンとして掲げられている。また、「全国先住民運動の再接合と構築」を推進する集会をメキシコ市で 4 月 9・10 日に開催することが予告されている。この呼びかけに対し、CNI は、連邦・州政府の役職にいる人物や組織が呼びかける再接合は、政府・政党からの自立を原則とする CNI の立場と相いれないと牽制している (CNI 2010)。この牽制のためか、予告されていた「全国先住民運動の再接合と構築」集会は開催されなかった。

全国先住民運動の再接合を旗印とする集会は、冒頭に紹介した 2010 年 9 月 15 日の「200 年間排除された先住民」を題するフォーラムまで開催されなかった。フォーラムの基調講演において、元国連先住民問題特別報告官 (2002～07 年) ロドルフォ・スタベンハーゲンは、国 (nación) 概念の再検討と先住民としての市民権 (ciudadanía indígena) 構築の必要性を指摘した。また、マルタ・サンチェスは、「真正なインディオ」というステレオタイプと絶縁した先住民の歴史やアイデンティティの再構成の必要性、MIN 政治部委員である CROIZS 代表のフリオ・アテンコは、真の多民族国家創設の必要性を強調した (*La Jornada*, 19/sept/2010)。

基調報告の後、(1) 独立、革命、不可分の国 (nación unitaria)、(2) 先住民自治と民主主義、(3) 非排他的な国家と多民族国家という3部会で討論がおこなわれた。討論終了後、フォーラムを組織したMINが策定した「全国先住民運動宣言」が読み上げられた。宣言では、メキシコの変革、多民族多文化国家の構築にむけて闘う先住民運動は、征服以前に起源をもつ「荣誉あるメキシコ性」²¹⁾を誇るべきという歴史認識が展開されている。同時に、分散化状態にあるメキシコ先住民運動を一つの運動としてまとめ、メキシコ先住民全体を真に代表する多元的で非排他的な組織を構築し、「先住民組織の新しい空間」の創出するため、「メキシコ国 (Nación Mexicana) の再創立 (refundación) のための協定」をまとめる作業が始まっていることが報告された²²⁾。その作業の叩き台として、「メキシコでの民主的多民族国家にむけた国に関する先住民のプロジェクト (Proyecto Indígena de Nación)」が提示された (MIN 2010)。

この文書は、(1) 歴史的背景、(2) 民主的でインターカルチュラルな政治関係にむけて、(3) メキシコにおける民主的多民族国家に向けた国 (Estado-Nación) の再創立という3部で構成される。(1) 部は、先住民が「国の文化遺産の保持者」とされ、政治的主体として認知されていないメキシコの歴史を要約したものである。(2) 部では、サンアンドレス合意不履行と2001年の反動的な先住民法採択で無視されたままの状態にあるメキシコの民族集団・文化的多様性の認知が不可欠とされている。(3) では、民主的な多民族構成の国家としてメキシコ国を再創立するには、公的な権利主体としての先住民、先住民の伝統的な領域、第4レベルの権力としての自治的な先住民行政地区・地域を憲法で認知することが不可欠としている。全体としては、ペンディング状態のままのサンアンドレス合意の実現を求めているものといえる。

MIN作製の「国に関する先住民プロジェクト」の浸透度に関しては疑問点が多い。予告されていた「先住民全国集会」は、MINと先住民農民勢力連合 (UFIC)²³⁾の呼びかけで、2010年10月中旬にメキシコ市トラウアック区で開催された。「先住民の尊厳からメキシコ国の再構成 (reconstitución) へ」²⁴⁾をテーマとした集会で採択されたトラウアック協定では、「国に関する先住民プロジェクト」に関する協議を踏まえ、2011年4月にメキシコ市で第1回先住民農民全国集会を開催することが謳われている。また、10月下旬、ミチョアカン州パツクアロ市で第3回DPI集会が開催され、2011年4月の先住民農民全国集会での「国に関する先住民プロジェクト」の公表、2012年選挙でMINの活動を可視化することなどが公約とされていた (DIP 2010)。しかし、2011年4月に予定されていた第1回先住民農民全国集会は開催されなかった。MIN政治委員のフリオ・アテンコは「国に関する先住民プロジェクト」の広報を2011年秋時点でもおこなっていた²⁵⁾。

結びにかえて

MINが提唱した「国に関する先住民プロジェクト」は、「国家プロジェクト」策定の過程から排除されてきた先住民による独自の国家プロジェクトの提起 (Torres Rodríguez 2000:193-195) である。この種の国家プロジェクトの試みは、1994年のEZLN武装蜂起以降、自治をめぐるフォーラムの場として発足したCNIの場においても試みられてきた。しかし、連邦政府のサンアンドレス合意不履行や反動的先住民法制定によって、多文化主義的なインディヘニスモの枠を超えた政治主体として先住民を認知するという基本的要求は満たされることはなかった。2000年の総選挙が間近になると、既存の政治体制との関係や政治参加をめぐる方針の差、先住民自治

の在り方をめぐる見解の相違が顕在化していった。

既存の国家への政治参加を拒否し、「事実としての先住民自治」の実践という選択肢を選んだ EZLN や CNI に対して、ANIPA 系の先住民運動は国家制度への参加を通じて先住民自治の憲法認知という方針を選択した。既成の政党とも連携するなかで、行政地区権力の掌握や行政地区再編、多民族集団で構成された農地・生産組織形成などを追及することで、国家体制の変貌、先住民民族と国家の社会的協定の見直しを目指そうとするものだった。しかし、いずれの試みも挫折し、メキシコにおける先住民運動は分散化したままの状態である。

とはいうものの、CNI や ANIPA、MIN などの試みとは別次元で、先住民組織の出会いの場が組織されていることも忘れてはならない。代表例として、先住民通信全国議会 (CNCI) や代替ツーリスモ先住民ネットワーク (RITA) など、特定部門の全国組織やネットワークを挙げることができる。CNCI は、メキシコを代表する全国先住民組織が不在のため、アビヤ・ヤラ先住民大陸サミットなどの国際集會にメキシコ代表に近い形で参加してきた。これらの組織は先住民共同体全体を代表するものとはいえないが、先住民共同体の自立・自治を試みる運動の相互連絡役となっていることもある。

この種の先住民運動の全国ネットワークや国内の先住民通文化大学 (universidad indígena intercultural) が中心となって、先住民社会フォーラム (Foro Social Indígena, FSI) が 2009 年末に発足したことも指摘しておく必要がある。FSI には、ゲレロ州の共同体権威地域審議会・共同体警察、オアハカ州の UCIZONI、オアハカ先住民民衆審議会やサンファン・コパラ自治行政地区など、「別のキャンペーン」の賛同者だった先住民組織も参加している。2010 年 10 月にゲレロ州立通文化大学で開催された FSI 第 2 回集會には、17 州から 400 名弱の参加者があり、先住民民族を「現地人民 (Pueblos Originarios)」²⁶⁾ と変えることも提唱されている (FSI 2010)。

サンアンドレス対話にともなう先住民組織の新しい空間が頓挫した 20 世紀末の段階で、全国先住民運動を展開する空間が形成されにくい要因として指摘されていたのは、集會や会議に参加する費用負担などの経済的要因、コミュニケーションの困難さ、参加者による事後報告などの取り組みの欠落、自治をめぐる立場の差などである (Palafox 2003:66-67)。CNI と ANIPA の分岐をもたらした主要因は自治をめぐる立場の差だったが、先住民共同体や先住民組織のおかれた状況に内在する要因はいまだに克服されず、全国先住民運動の脱臼状態 (desarticulación) は継続している。

国家としての経済・社会・文化的統合や再構成・編成で不可欠な先住民自治は、メキシコ社会の民主主義的変革においても不可欠である。多文化主義的な国民国家に代わる多民族国家の再創設が提起されないかぎり、メキシコにおける全国先住民運動の再接合の可能性は少ない。

付記：本研究は第 32 回日本ラテンアメリカ学会定期大会 (2011 年 6 月 3 日、上智大学開催) での発表に基づくものである。また、各種資料は国際インディオ通信 (AIPIN) のヘナロ・パウティスタ氏提供によるものが多い。研究実施に当たっては、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (B) 「中米先住民運動における政治的アイデンティティ：メキシコとグアテマラの比較研究」(研究代表者池田光穂) に負っている。関係各位に謝意を表したい。

注

- 1) CNPIに参加していた勢力は、官製 CNPI、半独立のインディオ人民全国調整委員会、独立農民運動のアヤラ計画全国調整委員会 (Coordinadora Nacional de Plan Ayala, CNPA) などに分岐した。
- 2) 500周年記念事業に対抗する先住民運動の多様性は、Sarmiento 1998 所収の資料から伺える。
- 3) 憲法 27 条改正には、CNPA 傘下の先住民運動組織が反対運動を展開したが、メキシコを多文化構成国家と定めた憲法 4 条改正には、FIPI を除いて積極的な運動は展開されなかった。
- 4) 中部太平洋先住民フォーラム、マヤ半島フォーラム、オアハカ・フォーラム、マヤ・チョンタル先住民フォーラム、アナワック地域先住民常設フォーラム、上部組織の全国先住民常設フォーラムがある。
- 5) アルテペトル・ナウァ協会や 1990 年代創設の先住民体験分析セミナー (Seminario de Análisis de Experiencias Indígenas AC) は NGO 資金受け入れ目的の団体と批判されている。
- 6) 2001 年 12 月のマルコス・マティアス総裁解任後、INI 職員のみへ出身の先住民ウベルト・アルデスが任命されたが、2003 年 5 月の CDI 発足により INI は消滅した。
- 7) ネオ・インディオヘニスマは、1970 年代エチエペリア政権の先住民政策に対しても使われていた (小林 1993)。PAN 政権のインディオヘニスマの評価は Hernández et al. 2004 を参照されたい。
- 8) 例外は、非 ANIPA 系の組織など多様な勢力で構成されたゲレロ州の CG-500 と CNMI である。先住民法案採択に抗議し INI 司法局長を辞任したロペス・バルセナスが委員に任命されている。
- 9) ナシオン・プレペチャ布告はプレペチャ先住民共同体によって 1992 年に批准されていた (小林 2012)。
- 10) ゲレロ南東部ショチストラウァカでナウァとトラパネカの両親に育てられた彼女は、自らをアムスゴと規定している。ANIPA 総裁の後、2009 年から中米メキシコ地域先住民女性連盟代表を務めている。
- 11) 当初、EZLN 代表団は 2006 年上半年期に国内を一巡し、6 月末にチアパス州に帰る予定だった。アテンコ事件で中断された「別のキャンペーン」は、翌 2007 年 4 月に再開された。
- 12) PUMC は 2004 年 12 月に発足し、代表は元 III 総裁のホセ・デ・バルである。
- 13) ①憲法改正、②制度改正、③協議審議会創設、④インターカルチュラル教育推進、⑤先住民専門家の政権登用、⑥ INALI 創設、⑦ 6 番目の選挙区単位創設、⑧先住民族開発統合計画策定という 8 項目に関して評価が行われた (DPI 2005)。③、④、⑥に関しては、2003 年に制度として発足した。
- 14) マルタ・サンチェスは ANIPA、マルセリーノ・ディアスはバルサス上流ナウァ民族審議会 (Consejo de Pueblos Nahuas de Altos Balsas) として署名している。
- 15) 「別のキャンペーン」に参加したカルロス・マンソは「肩書なし」だが、2008 年 9 月オアハカ州クイカトランで開催された CNI 第 12 回拡大会議以後、風力発電反対を掲げ CNI 集会に参加している。
- 16) 2007 年の第 3 回アメリカ大陸先住民族サミット実行委員の ANIPA のメンバーは、サミットに出席しなかった。国際インディオ通信代表は、ANIPA は機能不全とコメントしていた。
- 17) 先住民問題検察局構想に対する FPIM の反対表明 (2009 年 11 月) では、MAIZ、UCIZONI、CACTUS、CPIG (代表マルセリーノ・ディアス)、民主弁護士協会などの代表が署名している。
- 18) MAIZ は PRD 系の民主農民連合の一部が 1996 年に組織した先住民農民組織で 12 州を活動基盤とし、UCIZONI、CACTUS とともに、人民自決メキシコ連盟を構成している。
- 19) 2010 年、サンファン・コパラ自治行政地区は準軍事組織による武力封鎖で強制退去を余儀なくされ、支援活動の過程で前記の FPIM 声明に CACTUS 代表として署名していたメンバーが殺害

された。

- 20) 前州政府が提出した州先住民法案に関して、親 PRD 系の ONP は支持、親 EZLN 系の NPZ は反対だったが、両者とも現州政府（2009～2011年）の先住民対策部門の顧問に登用されている。
- 21) ここで言及されているメキシコ性の起点はメキシコ盆地でメシカによる覇権確立に相当する紀元 1300 年前後になり、メキシコという国が 710 年の歴史を持つという主張である。
- 22) 国の再創立という概念は、FZLN が提唱された時期、民主主義と多文化性に基づく共和制国家の再創立を呼びかけるかたちで提起されたことがある（Castellanos Guerrero y López y Rivas 1997）。
- 23) UFIC は、元 CNI 移行委員会メンバーのサウル・ピセンテ（現在国連先住民問題常設フォーム委員）が中心となって 2006 年に創設された PRD 系列の農民・先住民組織で、国内 25 州に活動基盤をもつ。
- 24) 再建は、分断・弱体化された先住民族の構造を修復・再創造することである（Sarmiento 2001: 249-250）。
- 25) 2011 年 11 月 23・24 日、メキシコ市で、MIN の呼びかけによる「21 世紀の先住民の挑戦」が開催され、国内 21 州から 100 名余りの先住民運動関係者が参集した。そこでは、「第 6 の太陽」という新しい時代にいることが強調されている。
- 26) 近年、先住民組織においては、先住民族（pueblos indígenas）やインディオ人民（pueblos indios）でなく、現地人民（pueblos originarios）という表現が好んで用いられるようになっている。

参考文献

小林致広

- 1983 「メキシコのネオ・インディヘニズム」ラテンアメリカ研究年報 3 号, 106-127 頁。
- 2002 「メヒコの先住民法改正と自治を求める運動」神戸市外国語大学外国学研究 52, 139-154 頁。
- 2004 「サパティスタの先住民自治実践—10 年間の実践と自治行政地区再編（その 1）」神戸外大論叢 55-5, 61-79 頁。
- 2012 「ナシオン・ブレベチャの試み—メキシコ・ミチョアカン州における先住民地域自治の模索と挫折」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学』昭和堂（印刷中）。

中南米におけるエスニシティ研究班

- 1998 『サンアンドレス合意と先住民族自治—メキシコにおけるサパティスタ蜂起と先住民の権利』神戸市外国語大学外国学研究 40。

Anónimo

- 2003 “Los senderos. ¿Se bifurcan o se encuentran?” *Ojarasca*, No.72.
- 2005 “Relatoria de Intervenciones de las Organizaciones Indígenas y Pueblos Indios en la Reunión con el EZLN en Carmen Pataté, 12, 13 y 14 de agosto, 2005”. en http://www.nacionmulticultural.unam.mx/declaraciones/documentos/decl_054.pdf. (aceso 2011/07/11)

Asamblea Nacional Indígenas Plural por la Autonomía (ANIPA)

- 1999 *Declaración de Principios de la ANIPA Agupación Política Nacional* (ANIPA-APN).

Bermejillo, Eugenio

2006 “Voces del IV Congreso Nacional Indígena”, *Ojarasca*, No.109.

Cámara de Diputados

2001 *Foro “Los pueblos indígenas ante la reforma constitucional sobre derechos y cultura indígena”*, México, DF, 19-20 de enero.

Castellanos Guerrero, Alicia y Gilberto López y Rivas

1997 “Autonomías y movimiento indígena en México: debates y desafíos”, *Alteridades*, No.13.

Congreso Nacional Indígena (CNI)

2003 *Acuerdo de Suljaa, novena reunión ampliada del CNI en la región Centro Pacífico*. Xochistlahuaca, Guerrero, 30 de marzo.

2005 *Palabras de Resistencia Indígena. Pronunciamentos y declaraciones del Movimiento Indígena Mexicano y del Congreso Nacional Indígena (2001 – 2005)*.

2006a *Declaración de N'donhuani*. San Pedro Atlapulco, México, 5-6 de mayo.

2006b *Declaración de Mezcala*. Poncitlán, Jalisco, 19 de noviembre.

2010 *Declaración de Uweni Muyewe*. Mezquital, Durango. 28 de marzo.

Díaz Marielle, Lucio

2005 “Resistencia, autonomía y sustentabilidad”, *Rebeldía*, No.36, pp.52 – 60.

2006 “Los pueblos indios en la Otra campaña”, *Rebeldía*, No.44, pp.44 – 52.

El Devenir de los Pueblos Indígenas (DPI)

2005 *Encuentro: El devenir de los pueblos indígenas en el siglo XXI*. México, DF, 19 de abril.

2006 *Pacto por el Devenir de los Pueblos Indígenas de México*. México, DF, 14 de marzo.

2007 *Reunión sobre el Devenir de los Pueblos Indígenas de México*. México, DF, 14 de febrero.

2010 *Declaración de la Unión del Pacto por el Devenir de los Pueblos Indígenas de México*. Patzcuaro, Mich. 28 y 29 de octubre.

Encuentro Nacional por la Rearticulación del Movimiento Indígena (ENRMI)

2009 *Declaración de Coxcatlan*. 6 de diciembre.

2010 *Declaración de Paracho-T'arhetzurhuan*. 13 de febrero.

Foro Social Indígena (FSI)

2010 *Memorias de Foro Social Indígena 2010*. La Cienega, Malinaltepec, Guerrero.

González, Carlos

2005 “El Congreso Nacional Indígena. Un espacio de encuentro y unidad”, *Ojarasca*, No. 102.

2006 “Congreso Nacional Indígena. Diez años en brecha”, *Ojarasca*, No. 113.

Gutiérrez Chong, Natividad

2010 “El activismo político indígena y la institucionalización del Estado: ¿Políticas de indiferencia o

de reconocimiento cultural?”, *Grandes Problemas de México VI: Movimientos Sociales*, Bizberg, Ilán y Francisco Zapata coord., pp.147 – 180, El Colegio de México, México.

Hernández, Rosalva Aída, Sarela Paz y María Teresa Sierra coord.

2004 *El Estado y los indígenas en tiempos del PAN: neoindigenismo, legalidad e identidad*. CIESAS/ Miguel Ángel Porrúa, México.

Jiménez Bartlett, Lelia María

2005 *Multiculturalismo y derechos indígenas en México*. Tesis doctoral de Universidad Carlos III de Madrid. Instituto de Derechos Humanos.

Jiménez, Lucina

2006 “México: Lo que viene para los”, *El Universal*, 9 de febrero.

Leyva Solano, Xochitl

2005 “Indigenismo, indianismo y “ciudadanía étnica” de cara a las redes neo-zapatistas”, *Pueblos indígenas, Estado y democracia*, Pablo Dávalos comp., pp.279 – 303, CLASCO, Quito.

López Bárcenas, Francisco

2000 “El viraje de algunos líderes indio. De la autonomía al indigenismo”, *Masiosare*, 30 de Julio.

Molino Ramírez, Tania

2000 “La encrucijada del movimiento indio”, *Massiosare*, 3 de Septiembre.

Movimiento Indígena Nacional (MIN)

2010a *Declaración del Movimiento Indígena Nacional*, 15 de Septiembre, México-Tenochtitlán.

2010b *Proyecto Indígena de Nación por un Estado Plurinacional Democrático en México*, 15 de Septiembre, México.

Navarrete, Rodrigo

2010 “Gobernabilidad neoliberal y movimientos indígenas en América Latina”, *Polis, Revista de la Universidad Bolivariana*, Vol. 9, No. 27, pp.481 – 500.

Overmeyer-Velázquez, Rebecca

2010 *Folkloric Poverty. Neoliberal Multiculturalism in Mexico*. The Pennsylvania State University Press, University Park.

Palafox, Castillo

2003 *Organizaciones indígenas independientes: el caso del Congreso Nacional Indígena*. Tesina de Licenciado en Sociología, UAM-Ixtapalapa.

Ruiz Hernández, Margarito

1999 “La Asamblea Nacional Indígena Plural por la Autonomía (ANIPA). Proceso de construcción

de una propuesta legislativa autonómica nacional". *Mexico: experiencias de autonomía indígena*, Aracely Burguete coord., pp.20 – 53, IWGIA, Copenhagen.

Sarmiento, Sergio coord.

1998 *Voces indias y V centenario*, INAH.

Sarmiento, Sergio

2001 "Procesos y movimientos sociales en la montaña de Guerrero. Entre el corporativismo y la violencia", *Los caminos de la montaña. Formas de reproducción social en la montaña de Guerrero, México*, Canabal Cristiani, Beatriz coord., pp.239 – 256, UAM/CIESAS/Miguel Ángel Porrúa, México.

Torres Rodríguez, José Jaime

2000 *Las luchas indias por el poder local. Los casos de Huehuetla, Sierra Norte de Puebla y Rancho Nuevo de la Democracia, Guerrero*, Tesis de maestro en Antropología Social, CIESAS.

Vera, Ramón

2004 "Reunión de Congreso Nacional Indígena Región Centro-Pacífico. A contrapelo de la clase política", *Ojarasca*. No.83.

2006 "Congreso Nacional Indígena. Un espacio de lucha en la Otra Campaña", *Ojarasca*, No.111.

